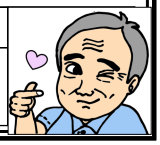
国語学習プリント　少年の日の思い出　前　　date：　　年　　月　　日

学習内容：構成把握 と 情景描写 ～ 主題

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名



◎この文章（小説）の作者名

ヘルマン・ヘッセ

◎この文章の構成（場面構成）ー大きく分けて二つの場面で構成されている。

前半▼（A　現在　）の場面　書き出し＝P198 L1 ～ P200 L10

・この場面の主人公（　私　）

後半▼（B客の回想）の場面　P200 L12 ～ 終わり＝P210 L8

・この場面の主人公（　僕　）＝（客）

★A 現在 の場面（前半部）

◎ 情景を読み取る①

a 季節　夏（晩春でもよいかも）p200 L9 かえるが遠くから甲高く

b 場所　湖畔沿いの私の家（別荘）　夏至に近いころ

c 時間　夕方　「ちょうど私の末の男の子が、おやすみを言ったところ」

◇ここまでのところで、「あれ?」「どういうこと?」と思った点

例 末の男の子寝るの早くね　前半部はなぜあるの　など

季節が夏で緯度の高いドイツでは日が沈むのが遅い

◎ 情景を読み取る②（情景把握）

a P198 L2「窓の外には、色あせた湖が、丘の多い岸にするどく縁取られて、遠くかなたまで広がっていた。」とは、どんな情景か（頭に浮かべてみる）

わずかに残る空の明るさを映す湖が暗くなってきたため色彩を失い、光を反射しない岸が黒く縁取って見える様子

b P199 L1「私は、ランプを取ってマッチを擦った。すると、たちまち外の景色は闇にしずんでしまい、窓全体が不透明な青い夜の色に閉ざされてしまった。」とは、どんな状況なのか。（頭に浮かべてみる）

ランプをつけたことによって、部屋の中が明るくなり、今まで見えていた外の景色が見えなくなる様子

c P200 L6「彼は、……　緑色のかさをランプにのせた。すると、私たちの顔は、快い薄暗がりの中にしずんだ。」

たばこに火をつけ というところからランプは卓上にあると思われる。そこにかさをかぶせたということは、部屋の上部が暗くなった様子

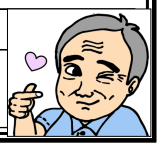
ーメモー

国語学習プリント　少年の日の思い出　後　date：　年　月　日

学習内容：構成把握 と 情景描写 ～ 主題

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名



★客の回想 の場面（後半部）

◎「僕」のちょう集めに対する熱情ぶりを表している表現

全くこの遊戯のとりこ

他のことはすっかりすっぽかしてしまった

みんなは何度も、ぼくにそれをやめさせなければなるまい、と考えたほど

学校の時間だろうが、お昼ご飯だろうが、もう塔の時計が鳴るのなんか、耳に入らなかった。

パンを一切れ胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆け歩く

p200 L12 ～ p201 L2 の段落が熱情ぶりを現している。

◎P201 L7「幼い日の無数の瞬間」とは

・強くにおう、乾いた荒野の、焼けつくような昼下がり

・庭の中の涼しい朝

・神秘的な森の外れの夕方

走馬灯のように、めくるめく順不同の思い出

◎「僕」の環境

・P202 L3「自分の宝物」とは

自分のちょうの収集

・P202 L8「自分の幼稚な設備」とは

つぶれたボール紙の箱

劣等感

◎ 隣の子供について

▽名前（後で出てくる）

エーミール

▽素性（隣の子供の情報）

・中庭の向こうに住んでいる先生の息子

・非の打ちどころがないという悪徳をもっている

↑

僕からすれば、「子供としては二倍も気味悪い性質」だった。

・非常に難しい、珍しい技術を心得ていた。

あらゆる点で（ 模範 ）少年

そのため（僕は妬み、嘆賞しながら彼を憎んでいた。）

▽僕から見たエーミールを表す別の表現

・専門家

・こっぴどい批評家

◎ クジャクヤママユをさなぎからかえしたうわさを聞いたときの僕

（ そのときほど、僕は興奮しないだろう。 ）

つまりとても（ 驚いた ）

◇その驚きの度合いを表現した部分

今、僕の知人の一人が百万マルクを受け継いだとか、歴史家リビウスのなくなった本が発見されたとか

P203 L17 ～ P204 L1

以上に

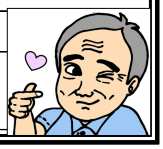
クジャクヤママユは、（僕が熱烈にほしがっていたちょう）

国語学習プリント　　少年の日の思い出　後2　　date：　　年　　月　　日

学習内容：構成把握 と 情景描写 ～ 主題

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名



★客の回想 の場面（後半部）　2　・・・続き

◇心情の変化を読み取ろう

◎P205 L11「四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。」

①a この表現にみられる技法（表現技法）

擬人法　（人でないものを人であるかのようにたとえる修辞法）

b この表現からわかる「僕」の心情

目をそらせないほどの魅力を感じている

②このあと（見たあと）の僕の感情や取った行動

・この宝を手に入れたいという、逆らいがたい欲望を感じて、僕は、生まれて初めて盗みを犯した。

◎ちょうをエーミールの部屋から持ち出したときの僕の感情

大きな満足感 のほか何も感じていなかった。

◎階段を下り、下から上がってくる音が聞こえたときからの心情

・僕の良心は目覚めた。

←・自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟る

←・見つかりはしないか、という恐ろしい不安に襲われる

←・大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。

※下劣＝品性の卑しさが目立つ様子　大それた＝とんでもない

女中と擦れ違ってから

胸をどきどきさせ、額にあせをかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら

◎「何事もなかったようにしておかなければならない」とエーミールの部屋に引き返してから

a P206 L13「どんな不幸」とは

クジャクヤママユがつぶれてしまったこと

b その時の僕の気持ち

盗みをしたという気持ちより、自分がつぶしてしまった、美しい、珍しいちょうを見ているほうが、僕の心を苦しめた。

◎母に一切を打ち明けたあと、僕がエーミールのところへ行くのをためらった理由　（一文で抜き出してみよう）

彼が、僕の言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようともしないだろうということを、僕は前もってはっきり感じていた。

から

◎僕がやったのだ、と言ったときのエーミールの反応

激したり、僕をどなりつけたりなどはしないで、低く「ちえっ。」と舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていた。

「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」

彼は冷淡に構え、依然僕をただ軽蔑的に見つめていた

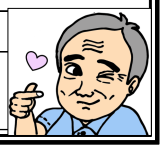
「結構だよ。僕は、君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、君がちょうをどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ。」

国語学習プリント　少年の日の思い出　後3　date：　年　月　日

学習内容：構成把握 と 情景描写 ～ 主題

＿＿年＿＿組＿＿番

氏名



◎僕から見たエーミール
（僕からはエーミールがどのように見えていたのか）
エーミールは、まるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義を盾に、あなどるように僕の前に立っていた。

語句（　あなどる　）＝相手をばかにして軽く見る

◎僕が悟ったこと
一度起きたことは、もう償いのできないものだということ

◎ P210 L2
「母が根掘り葉掘りきこうとしないで、僕にキスだけして、構わずにおいてくれたことをうれしく思った。」
▽ここからわかる僕にとっての母の存在とは
唯一の理解者〔僕を理解してくれる唯一の存在〕

◎ P210 L7
「ちょうを一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶしてしまった。」のはなぜか。ワークP142を参考に考えてみよう。
・取り返しがつかないことをしたという罪悪感から
・エーミールへの怒りを感じつつも言い返せない悔しさから
・ちょうへの思いを断ち切るため
・自分を罰するため

ヘッセの書き物机

【応用編】

◇構成のなぞ（現在←回想で終わる）
現在の場面の必要性
自分の中にあるそれぞれ〔私、客（僕）、エーミール〕の立場を表現するため　現在・青年時代・少年時代

◇筆者を表す（投影する）登場人物は
母を除く登場人物〔私、客（僕）、エーミール〕
☆ワークP132の挿絵（ヘッセの書き物机の収集）片羽根のとれたヤママユガからわかること
「少年の日の思い出」に照らすと、ちょうの収集が残っているとすれば、エーミールのところ
つまり、エーミール＝作者なのでないか
ヘッセは宣教師（先生）の息子
とすれば ←
母を除く登場人物〔私、客（僕）、エーミール〕は、作者を投影したものではないか。

◎この話の主題は何なの（筆者は何を述べたかったのか）
物事を杓子定規に理不尽に決めつけてかかる世の中への反発
弁解・弁明の余地もゆるされぬ世の中
理解しようとする心を持たない社会
自分が最も嫌う行為（理解しようともせずに頭ごなしに決めつけること）を自分で自分がしていたというパラドックス

ヘッセが一九一一年6月6日に、ミュンヘンの雑誌《青年》に発表した「クジャクヤママユ」が初稿であるが、二十年後の一九三一年に改稿し、ドイツの地方新聞8月1日号に掲載されたのが「少年の日の思い出」である。
なぜ、一度発表されたものを新聞掲載したかは定かではないが、ナチス台頭のころであり、後に書くことを奪われるヘッセにとっては、迫り来る世の情勢に、何らかの理不尽さを伴う圧力を感じたため、大人も目にする新聞に掲載したのではないかと想像できる。この「少年の日の思い出」は訳者高橋健二氏が直接ヘッセから原稿をもらい日本に持ち帰って発表されたものである。